

想うがままに

忘れがたき人②

山六さん、原全さん、そしてお雪さん

本誌編集委員 小寺山康雄

山六さん（山田六左衛門、一九〇一〜七八年）、原全さん（原全五、一九一〇〜三年）は種子島出身の先輩後輩の間柄であり、文字どおり草莽の志士にして、統一社会主義同盟（統社同）の創始者である。また『現代の理論』の刊行にも多大の貢献をした。

一九六一年夏、日本共産党八回大会に向けて、ぼくらは宮本顕治ら主流派の民族主義的で日和見主義の綱領草案、官僚主義的・事大主義的で非民主主義的な党体質に対して闘った。

山六、原全は春日庄次郎、内藤知周、西川彦義、亀山幸三、内野壮児らとともに

に、七人の反主流中央委員、同候補として、宮顕体制と闘った。いわば黒澤明の『七人の侍』のごとき奮迅ぶりであったが、山六は三船敏郎のような役回りであったといえよう。百姓あがりの三船は侍のテーマエや面子にこだわらず、奔放自在に暴れるが、それは山六の英姿でもあった。残念ながら志村喬のような有能な参謀を欠いていたため、狡猾な宮顕にしてやられたのである。

大きく打てば大きく響き
小さく打てば小さく響く

六二年五月に結成された統社同に

は、「七人の侍」のうち、山六、原全、春日庄次郎の三人が参加したが、活動の中心は「七人の侍」より二世代ほど若い故安東仁兵衛、故大森誠人、村田恭雄、松葉武雄、直原弘道らになった。労働者も学者も学生も関西が圧倒的に多かったので、本部は大阪に置かれた。

社革から離れた理由のひとつでもあったが、統社同は党建設よりも労働運動や平和運動など大衆運動を重視し、そのための政策提起に活動の中心をおいた。そのことが社会党や総評、大阪に多かつた無党派活動家に好意的にうけとめられるとともに、理論的政策的

能力の高さも相まって、統社同は過大評価され、信頼された。くわえて山六の誰からも好かれるキャラクターが、統社同の評価をいやがうえにも高めた。

山六は、当時六人もいた専従の自分を除く生活費から事務所の家賃まで、一人でかき集めてきた。戦前の活動家仲間でも多少とも財を成した人や鹿児島県人会の知人などはまだしも、共産党関西地方委員長時代にたまたま府の審議会で隣に座っていただけの会社役員や戦前の争議で闘争相手だった元資本家など、だれかれかまわず訪ねては「革命家山六を遇する途としては……」と、つまり金を出せと、大声を張り上げるのである。そして名刺の裏に「一金拝借仕候」と書いて「集金」する。

社会党や共産党のように多少なりとも「現世利益」が期待できる政党とは違って、現世どころか来世の利益も幻想できない統社同に金を出す人も偉いが、堂々と「拝借」し、けつきよくは踏

み倒しながら嫌われず、恨まれない人はなんと偉い人かと感じ入ったものだ。『現代の理論』の定期購読者をつくるのにひいひい言っているわが身の小ささに恥じ入るばかりである。

山六はまた、こんな人でもあった。事務所をたまたま訪れた多くの後輩が近々結婚するが、何とか公営住宅に入れないかと相談にきた。当時、公営住宅に入るには何十倍もの倍率をくぐらねばならなかった。傍で聞いていた山六は、例の烏打帽をかぶって「俺について来い」と言って府庁に向かった。そしてアポもなく副知事室に入り「どうかね。この男の家を世話してやつてくれんか」と頼んだ。こうして住宅問題は一挙に解決したが、副知事は「山田先生、この程度のことでは先生がわざわざおいでになる必要はありません。私が言っておきますので、これからは住宅課長にお電話いただければ、それで万事解決します」と、婉曲に再訪を

断った(のだとぼくは思う)。

しかし、山六は意に介さず、その後「たかが」公営住宅入居のことで、自慢の宇治茶を持参して副知事訪問をやめなかった。山六がいうには「共産党時代の交渉で若い党員が副知事の襟首にタバコの火をわざと落とした。党員を怒鳴りつけ、非礼を詫びたが、副知事は許してくれた。彼はそれ以来の友人なんだ。たまには会いに行つてやらねばならん」と呵呵大笑するのであった。こうして住宅問題を解決できた僕の友人は、一人や二人ではきかない。

山六は革命組織の財政から、一面識もない若者の住宅問題にいたるまで労をいとわぬ人だった。意味はすこし異なるかもしれないが、山六という人物は坂本竜馬が西郷隆盛を評して言ったように「大きく打てば大きく響き、小さく打てば小さく響く」融通無碍で、度量の幅がとて大きい人だった。

追悼遺稿集『濁流を悠々と』で旧友た

ちが証言しているように、山六は種子島の小学校から鹿児島一中時代にかけて、勉強と駆けっこはいつともトップで、女の子にも一番もてたという。それでいていたずら好きで、高等小学校時代に女生徒全員に同文のラブレターを送りつけたり、女教師の後をしつこくつきまとつて「十年早い」と叱られたりするマセガキだった。

死ぬまで吹き続けたホラ
「三千石の家老の末裔」

鹿児島一中時代にロシア革命に衝撃を受け、ちようど公演にきていた松井須磨子のカチューシャを聞いて「頭が左に傾いた」という。左翼になった山六は、早大、日大を中退して郷里の高等小学校の代用教員になるが、大杉栄の追悼会をやるうとしたためアカとして職場を放逐される。

一九二六年に姉夫婦を頼つて大阪にやってきた山六は、野放図にも知人の

警官を身元保証人にして岸和田紡績に入社するが、争議を扇動し解雇される。一九二八年の三・一五の大弾圧で逮捕され、敗戦まで入獄と釈放を繰り返す。この間全協(全国労働組合協議会)の幹部、共産党員として活躍するが、この時代にすでに後年の山六らしい発想の活動をしている。

ひとつは大阪府議会選挙で共産党中央が押し付ける党員候補者を蹴つて、左翼弁護士として高名だった小岩井淨をかつぎ、みごとに当選させてしまう。小岩井選挙には大阪中の労働者、農民が「湧いてくるように」馳せ参じたという。いまひとつは共産党が大衆団体である全協に「天皇制打倒」のスローガンを押し付けるのに反対したことがある。こうした活動を通じて、山六の名は全国に鳴り響くのである。

「革命(党)」というものは、こんなに人民に対して偉そうにするものだろうか。自分はいかなる人生の事業(たと

えそれが革命の大事業といえども)も、それぞれの人間の日常の延長としてしか考えられない。だから革命家として毎日が修業なのである」と、いつも述懐していた山六らしい逸話である。

戦前のあの時代、ともすれば殉教者として自己を昇華させることで苛酷な弾圧に耐えようとし、あるいは耐えられると意識的に錯誤した多くの共産主義者と異なつて、山六は一介の大衆として闘い、生きたのだ。革命は人民自身の事業であつて、他の何者も代行できないこと。したがつて人民が変わらなければ革命は可能でないこと。そしてコミンテルン第七回大会に先行して、統一戦線の思想を身につけていたこと。これらのことを山六は直感的に会得していたのだと、ぼくは思う。

しかし、何といつてもこの時代の山六にとつて最大最高の「獲得物」は「雪子姫」であつた。江戸時代から続く宇治の大茶商上林家の箱入り娘であつた

雪子さん（一九一〇四年）は、桃割れの髪の中や振袖の袂にピラを隠し、連絡係として大阪中を走り回った。山六は一目惚れし、非合法潜伏中にもかかわらず結婚式を挙げ入籍し、新婚旅行までした。桁違いの天衣無縫振りである。そのうえ子ども二人をふくめ一家四人は、その後ずっと上林家の居候であり続けた。山六が死ぬまで吹き続けた「薩摩藩三千石の家老の末裔」のホラは、雪子姫と上林家に対するコンプレックスがいわせたものであろうか。

烈々たる闘志を秘めた 青年のようにひたむきな原全

山六が太陽に向かって花開くひまわりとすれば、原全は人知れず咲く月見草である。しかし、この月見草は、山六が「目の色変えて階級闘争なんて考えたことはなかった」と、悠々たる境地で遊ぶのに対して、「自分の生きていく時代に、この木津川沿いの工場群

に、ひとつ残らず赤旗を立ててやる」と、烈々たる闘志を内に秘めた月見草なのである。その闘志は特高の拷問に暴れまくって、天井から吊り下げられていた捕縄を切ってしまうほど激しいものであった。

原全は、六五年に春日庄次郎とともに、志賀義雄が呼びかけた「共産主義者の大同団結」に応じるとして統社同を離れた。「大同団結」は、ソ連共産党から横槍がはいったせいかどうか知らないが、志賀が「なかつたことにしよう」と、いとも簡単に豹変したため実らなかったが、原全は「志賀さんはあんな男や」と平然としていた。ぼくは『「あんな男」を信用して統社同を辞めることなかつたやんか』と言ったが、原全は「それとこれとは別や」と、訳のわからん言い訳をするのだった。種子島男子は、山六といい、原全といい、畿内の俗人には窺い知れない奥行きを持つていると感じ入ったものである。

山六は戦前の獄中でも、戦後徳球に左遷され和歌山に単身赴任でとばされたときでも、つまり不遇のときほど「お雪を想う」の歌をせつせと書いた。

襲ノ国ノ島ノハタテニ君一人
荒海ノ旅ニ立ツト思ヘヤ（お雪さんが、種子島を単身訪れる事を聞いて、獄中でつくった相聞歌）

それに対して原全は生真面目に「私の労働運動史」として『大阪の工場街から』（一九八一年柘植書房）を上梓し、労働運動の再生を後世に託した。

山六の万葉人のような磊落、原全の万年青年のようなひたむき。対照的な二人であるが、二人に共通することは革命の現実性を信じ、それなしには生きていけないほど内面化していたことであつた。一挙的権力奪取を夢想するのではなく、長期にわたる粘り強い変革を続ける意思と能力が必要とされる今日にあつても、左翼にとつてそれは必要不可欠の人間の資質である。